０３／０９／２１　　礼拝メッセージ　　土井義広　副牧師

主　　題：いつか必ず評価は下る
聖書箇所：Ｉ コリント書３章１０－１７節

前回の箇所から学んだことは「クリスチャンの成長」についてでした。特にパウロが、そこで教えたことは、クリスチャンの成長とは、ただ単に、（１）私たちがより多くのみことばを蓄えることでも、（２）教会の出席率を上げることでも、（３）献金の額を増やすことでも、（４）奉仕の数を増やすことでもありませんでした。パウロがコリント教会に願っていたこと、また、神が今の私たちに願っておられることは、私たちが「愛において」成長することでした。
　神は間違いなく、私たちが成長することを願っておられ、そのために必要なものをすべて与えてくださっています。しかし、もし、私たちがその神の恵みをおろそかにしてしまって、成長する機会を自らの選択で潰してしまうなら、私たちは覚えなければなりません。その責任は、私たち自身にあるということを…。

私たちが本当に価値ある人生を送るためには？
今日の箇所は、パウロがクリスチャンに対してなされる「さばき」について教えている所です。パウロはそれを語ることによって、そのことを聞いたクリスチャンたちが少しでも意義のある人生を、本当に価値ある人生（信仰生活）を送って行くようにと願っていたのです。

１．私たちには「さばき」があることを覚える。　１０－１５節
　私たちが価値のある人生を送ることができるように、まず、パウロが教えることは、私たちには「いつか必ずさばきがある」ということを覚えよ！ということです。ここでパウロは、自分の働きの説明を通しながら、クリスチャンとはどのような者であり、どのようであるべきかを教えています。
　彼は特に、異邦人に対する福音宣教者として用いられました。彼の働きは、クリスチャンたちが『神の建物』（９節）とするなら、『建築家のように』（１０節）その『土台を据え（ていく）』（１０節）ことでした。もちろん、『その土台とはイエス・キリスト』（１１節）のことです。彼のしたことは、相手がユダヤ人であろうと、ギリシヤ人であろうと、イエス・キリストがだれであり、何のために十字架に架かって、その後、よみがえられたのかということを話すことでした。使徒２６：１９－２３ではアグリッパ王に向かってこのように言っています。「こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、 20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行ないをするようにと宣べ伝えて来たのです。 21 そのために、ユダヤ人たちは私を宮の中で捕え、殺そうとしたのです。 22 こうして、私はこの日に至るまで神の助けを受け、堅く立って、小さい者にも大きい者にもあかしをしているのです。そして、預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。 23 すなわち、キリストは苦しみを受けること、また、死者の中からの復活によって、この民と異邦人とに最初に光を宣べ伝える、ということです。」
　それには、
●まず、イエス・キリストを信じることが必要です。
　イエスは罪のないお方であったのに、自ら十字架に架かられました。それは、私たちの罪を赦すためであり、私たち人間は誰一人、自分の力では決して罪に対して勝利できなかったからなのです。イエスは罪に対して完全に勝利されました。死からの復活はそのことの証しなのです。信仰とは、ただ単に、イエスが神であり、死からよみがえられたお方であるということを信じるだけではありません。イエスこそが唯一の神であり、私の救い主であるということを信じ、そのイエスに心からの感謝と忠誠を捧げることなのです。
　私たちクリスチャンとは、そのように、しっかりとしたイエス・キリストという土台を据えられた人のことです。私たちはある時に、このイエス・キリストこそが自分の救い主であり、自分の生きる目的だと決心しました。何をするにも、このイエスこそが１番であり、イエスが喜んでくださることを自分もしよう！と決めたはずです。
　そのように、私たちが神の前に価値ある人生を送るためには、まず、あなたが「イエス・キリスト」を信じることが必要なのです。もし、あなたが今も、このイエスを拒み、自分の罪を悔い改めていないのなら、残念ながら、あなたは本当に価値ある人生を送っているとは言えません。何故なら、私たちの

人生を最終的に評価するのは私たち自身ではないからです。一体、誰があなたを造り、あなたにいのちを与え、必要なものを与え、導いてくださったのでしょう？神様ではないですか！　神があなたを造ってくださり、いのちを与えてくださったのです。その神は、今日もあなたに必要なものを与え続けてくださっているのです。
もし、生きている間にこの神を信じないでいたらどうなるののでしょう？⇒１５節に『もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。』とあります。聖書を見ると『火』は神の栄光や聖さ、罪に対する怒り、さばきなどの象徴として使われています。ここの箇所は、イエス・キリストを救い主として信じたクリスチャンを対象に書いていますから、具体的に、イエスを信じなかった人はどうなるのかということについては、直接、触れられてはいませんが、ここの箇所からでも、「火の中をくぐって、助からない」という予想は十分できます。黙示録にはこのようにあります。黙示録２０：１０，１５『そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。…いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。』。もし、あなたが、あなたの罪を赦し、あなたを救おうとして、自ら十字架に架かってくださったこのイエスを拒み続けるなら、あなたに下されるさばきは、永遠に続く『火と硫黄との池』で、いつまでも、終わることなく、苦しみ続けることになるのです。しかし、神はあなたがそんな苦しみに遭うことの無いように、あなたに救いを用意してくださったのです。

●「イエス・キリストを土台にする」とは？
　しかし、もしクリスチャンが今、このイエス以外を生きる目的にしてしまって、イエスからの命令を軽んじて、聖書の教えよりも、自分の勝手な願いや欲を優先してしまっているのなら、それは、このイエス・キリスト以外に土台を据えようとしていることになります。けれど、救われたクリスチャンが、イエス以外を信頼し、イエス以外に生きる目的を持って、聖書の教えを軽んじて自分勝手に生きることができるのでしょうか？この神を信じ、この神に喜ばれるように生きていこうと決心して、神によって変えられた私たちが、果たして、その神を捨てることなどできるのでしょうか？
　みことばは、それに対して、はっきりと答えをくれています。１１節『というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。』と。この『誰も』というのは「クリスチャンの内の誰も」という意味です。もし、あなたが本当に、イエスを救い主として信じ、救われているのなら、このイエス・キリスト以外の何かを信頼し、それを生きる目的にすることが如何に空しいことで、愚かなことであるかに気付くはずです。なぜなら、私たちの周りに存在するものの中で、一体、何が神と並ぶことができるでしょう？　何一つ、そんなものなどありません。

●神が判断されるものは何でしょうか？
「行ない」よりも「動機」に気を配るべきです。
私たちの人生は、イエス・キリストという土台の上に建物を建てるようなものだと、パウロは教えます。ここに材料が記されていますが、それらは『金、銀、宝石、木、草、わら』（１２節）といったものです。間違いなく、ここでパウロは、一つ一つの違いについて説明しようとか、また一見して分かるかどうかということを話そうとしているのではなく、「燃えないもの」と「燃えるもの」の区別をしています。それらが燃えるか燃えないかで、『各人（＝私たち）の働きの真価』（１３節）が試されるのです。それは私たちがこれまで、どのような信仰生活を送ってきたかです。
　私たちは皆、これまで、いろいろなことをしてきました。礼拝、祈り、賛美、伝道、奉仕などといった、直接信仰に関わるものから、普段の生活、労働、会話など、そういったすべてのものが、神の判断の材料となって、いつかさばかれるというのです。このことは、II コリント５：１０でも、このように語られています。『なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。』

　コリント教会の人たちは、一見、信仰熱心でした。真面目に礼拝に出席し、献金を献げ、奉仕も多く行ないました。そういった彼らの行ないは間違ってはいませんでした。では、何が間違っていたのでしょうか？　前回見た通り、それは「愛」です。言い換えるなら、彼らの行ないの背後にあった「動機」です。それが間違っていたために、彼らの中に分裂や分派、そういった争いごとが多くあったのです。私たちは、いつか必ず、神の前に立ち、これまでしてきたことの評価が下されるのです。その時の評価は、私たちが何時間、教会の奉仕に時間を費やしたか、また幾ら献金として献げたかということなどで

はありません。神がご覧になっているのは、その時の心＝動機なのです。
皆さんもよくご存知のとおり、あの、レプタ銅貨を２つ献金した貧しいやもめの話があります。マルコ１２：４１－４４を見てください。「それから、イエスは献金箱に向かってすわり、人々が献金箱へ金を投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持ちが大金を投げ入れていた。 42 そこへひとりの貧しいやもめが来て、レプタ銅貨を二つ投げ入れた。それは一コドラントに当たる。 43 すると、イエスは弟子たちを呼び寄せて、こう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れていたどの人よりもたくさん投げ入れました。 44 みなは、あり余る中から投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたからです。」　彼女は何故、イエスから賞賛されたのでしょう？　献金の額ではありませんでした。彼女が神を心から愛していたからです。
また、神がイスラエルの民に何と言っておられるか？　イザヤ１：１０－２０、「聞け。ソドムの首領たち。主のことばを。耳を傾けよ。ゴモラの民。私たちの神のみおしえに。 11 「あなたがたの多くのいけにえは、わたしに何になろう。」と、主は仰せられる。「わたしは、雄羊の全焼のいけにえや、肥えた家畜の脂肪に飽きた。雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない。 12 あなたがたは、わたしに会いに出て来るが、だれが、わたしの庭を踏みつけよ、とあなたがたに求めたのか。 13 もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙――それもわたしの忌みきらうもの。新月の祭りと安息日――会合の召集、不義と、きよめの集会、これにわたしは耐えられない。 14 あなたがたの新月の祭りや例祭を、わたしの心は憎む。それはわたしの重荷となり、わたしは負うのに疲れ果てた。 15 あなたがたが手を差し伸べて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。 16 洗え。身をきよめよ。わたしの前で、あなたがたの悪を取り除け。悪事を働くのをやめよ。 17 善をなすことを習い、公正を求め、しいたげる者を正し、みなしごのために正しいさばきをなし、やもめのために弁護せよ。」 18 「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。 19 もし喜んで聞こうとするなら、あなたがたは、この国の良い物を食べることができる。 20 しかし、もし拒み、そむくなら、あなたがたは剣にのまれる。」と、主の御口が語られた。」　　彼らは熱心にささげものをしていました。しかし、それが神には耐えられなかった、神はいけにえを必要とされていたのではないのです。それを献げる時の心（＝いわば動機を）をご覧になっておられたのです。
確かに、その人は救われているかも知れない、永遠のさばきに至ることはないのかも知れません、もし本当に救われているのであれば…。永遠に続く天に行けば、悲しみや苦しみ、後悔といったものはないでしょう。しかし、「そのような人の人生は空しい」とパウロは教えます。なぜなら、今、この生きている間に、幾ら多くの捧げ物をしても、時間を費やしても、汗水を流しても、それらが神の前に何の評価にもならないなんて、悲しいことではないですか？
「火」とは神の聖さの象徴でもあると言いました。あなたのこれまでの様々な行ない、その時の動機は、この神の聖さを通ることができるでしょうか？

２・神に対して聖くあること。　　１６－１７節
　私たちが、もっと価値のある人生を送ることができるように神は教えてくれています、その２番目は、私たちが神に対して、常に聖くあることです。

●『神殿』とはどのような所でしょう？
　１６節に『あなたがたは神の神殿』であると言われていますが、その根拠は何でしょう？⇒それは『神の御霊が…宿っておられる』（１６節）からです。私たちは神の住まい、神の宮なのです。
　新約の時代の私たちは、神が私たちの内に住んでおられると聞いても、そう驚かないかも知れません。しかし当時、このメッセージを聞いた人たちのことを考えて見てください。旧約の時代から、神が臨在しておられた（住んでおられた）所は神殿でした。だから、その神殿とは、当時の人たちにとって何よりも「聖い」所、「聖くなければならない」所でした。なぜなら、神はモーセに何と言われましたか？⇒出エジプト記３：４－６『主は彼が横切って…神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」…モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。』とあります。
　またレビ記１０章には、アロンの子たちが『異なる火』をささげた時、どうなりましたか？⇒『すると、主の前から火が出て、彼らを焼き尽くし、彼らは主の前で死んだ。』（レビ記１０：２）とあります。また、II サムエル記６章で、牛がひっくり返しそうになった『神（契約）の箱』を押さえたウザは

どうなりましたか？⇒『すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、神は、その不敬の罪のために、彼をその場で打たれたので、彼は神の箱のかたわらのその場で死んだ。』（II サムエル記６：７）とあります。
まさしく、レビ記１９：３０『あなたがたは、わたしの安息日を守り、わたしの聖所を恐れなければならない。わたしは主である。』とある通りです。
もちろん、神は遍在でどこにでも存在しておられる方です。しかし、神の臨在されている所は、特に、神のご性質が現われ、守られなければならないのです。だから、神殿においては、皆が厳粛な思いで、そして畏敬の念を持って集まってきたのです。
以上のことから分かる通り、神の神殿（臨在されるところ）は聖い所で、神がそこに宿っておられるというパウロのメッセージは、大変な「恐れと驚き」をコリント教会に与えたはずなのです。そうすることによって、コリント教会の皆がもっともっと自分の生き方に対して真剣になるように願ったのです。そのためここでは、『神殿』という言葉を「ヒエロン」（神殿、宮）ではなく、「ナオス」（神殿、至聖所を含む聖所）という言葉が使われているのです。

●ここで言われている『神の神殿』とは何を指しているのでしょう？
⇒単数形が使われていますから、「教会」のことです。
さてここで、パウロの言う『神の神殿』（１６節）とは何かと言いますと、多くの方は「信者」のことであると考えるでしょうし、実際、６：１９にはそのように教えられていますが、ここでは「教会」を指します。何故なら、この『神殿』という言葉が「単数」で表現されているからです。つまり、教会（信者の集まり）という所は、神が臨在され、神のご性質がどこよりも現されている所でなければならないのです。だから、私たちは教会を聖く保とうとするのです。そして、このような大切な所を乱すようなことは、決して許されるようなものではないのです。教会内で、分裂・分派を起こそうとすることはもちろん、様々な罪が横行することも許されないのです。もし、教会を意識的に攻撃するなら、その人には聖霊が宿っていることもないでしょうし、間違いなく、神はその人をさばかれます。

　如何でしょう、皆さん。私たちは、今、そんな大変な中にいるのです。この教会は、間違いなく神の神殿であり、神の臨在しておられるところです。旧約の人々が、恐れをもって、神殿に行ったように、またそれ以上に、祭司が万全の準備をして、聖所に入ったような思いで、皆さんは教会に来られておられでしょうか？　神があなたのことを今、ご覧になっておられ、あなたがどのような思いで賛美し、今、どのような思いでこの場所に座っているのかを吟味しておられるのです！また、教会を混乱させることは、聖所にある机や燭台を倒したり、壊したりするようなことなのです。　皆さんは、そのような厳粛な思いをもって常に生きておられますか？神が喜んでくださる、そのような思いで、教会に来ておられますか？
　⇒答えは要りません。神があなたのことを正しく評価してくださいます。大切なのは、「今まで」ではありません。「今から」です。